

ホワイトヘッドの『シンボリズム』（中）

細 井 雄 介

本「論叢」第38集を承けて、ホワイトヘッドの一講演の翻訳および注解を続行する。

翻訳の底本は Alfred North Whitehead: Symbolism—its meaning and effect, Cambridge Univ. Press, First Edition 1927, Reprinted by offset, 1958 である。訳文は「」によつてかこみ、若干の箇所では文意を鮮明にするために「」によつて訳者の解釈を補った。

本文八十八頁の小冊子に収められた本講演は全三章から構成されている。第一章の翻訳および注解はすでに前記第38集において完了した。本号では第二章を扱う。

ホワイトヘッドによれば、経験はそれぞれ独立している三様態をもつ（第一章第九節参照）。一つは知覚の *presentational immediacy* という様態、ついで知覚の *causal efficacy* という様態、最後に概念的分析（いわゆる思考）の様態である。シンボリズムを論じてホワイトヘッドは、深淺の度合を問わず一切のシンボリズムは、究極のところ、知覚の二様態の関連づけにその根拠を得ていると洞察した。本講演第一章の後半部分は知覚の二様態の一つ、*presentational immediacy* の特質を説明することに当てられていた。それを承けて第二章の前半部分では *causal efficacy* の特質が論じられることになる。

なお畏友中平浩司には第一章同様本章についても、原文照合の検討を願った。記して感謝の意を表しておきたい。

『シンボリズム——その意味と作用』

第二章

「1' causal efficacy に関するヒュームの見解

外界の直接知覚には明かに区別すべき二つの様態があり、これら二様態のあいだに行われる象徴的な相互作用のうち、人間のシンボリズムはその起源をもつ——これが本書の論題である。外界についての情報源はこのように二つあり、両者は緊密に連結してはいるものの明かに区別される。これら二様態は重複を生むものではなく、各自のもたらし情報には現に差異がある。一方が漠然としているところでは他方が精確であり、また、一方が重要であるときには他方は些末である。だが、これら「外界」呈示の二構図（two schemes）は構造上の諸要素を共有しており、それゆえ両構図はともに同一外界の呈示を果しているとみなされる。それでもなお「知覚ノ二様態乃至二構図ガソレゾレ呈示スル」二つの形態（two morphologies）を決定的に合致させるには若干の間隙が存在する。両構図が相交わるのは部分的にすぎず、両者の真の合致はいつまでも確定しえない。「コノヨウナ二様態乃至二構図ヲ結び合ワセル」symbolic reference が情動・意図・信念の変移（transference）を招くのであって、これは二構図から得られる直接的情報と両者交錯部分の諸要素とを知的に比較してみても説明できるものではない。この種の変移を説明するには「symbolic reference ヲ行ウ者ノ」未来に向けた実用的な狙い（a pragmatic appeal to the future）を探らねばならぬ。このような未来への狙いがあればこそ、象徴的に「知覚二様態ヲ結び合ワセル」最初の素朴な連結を、次後の経験に基づく知的批判が拡張し純化してゆくことのできるのである。

私は知覚様態の一方を 'presentational immediacy' 他方を 'causal efficacy' と名づけた。やきの講演では presentational immediacy の様態を詳細に論じたので、本講演では causal efficacy の検討からはじめなければならぬ。ヒュームに導かれる経験論者およびカントに導かれる先験論的観念論者がともにもっとも尊重してきた近代哲学の伝統を、私がここで論駁していることはやがてお判りいただけよう。いま近代哲学の伝統と約言したが、これをさらにあれこれと説明する要はない。だが若干の引用を行っておけば、私の訣別しようとする上記二種の思想が共有しているものは簡潔な要約を得たことになる。ヒュームは記している*——『複数の客体が相互間の関係もろとも感覚に呈示されるとき、われわれはこのことを推論というより知覚と呼ぶ。このばあい、思惟の行使、適切に言えば能動的作用は少しもみられず、感覚諸器官を通じて諸印象がひたすら受動的に受容されているばかりである。このように考えてみると、同一性および時・位置の関係に関してわれわれの行う観察は推論とみなすべきではない。なぜならば、これら二つのいづれに関しても、心 (mind) は感覚に直接呈示されたものを越えてで実在物の発見、あるいは客体間の諸関係の発見に向うことはできないからである。』

* 原注『人性論』（第一書）第三部 第二節。

この行文の真意はすべて暗黙の前提に支えられている。すなわち「心」(mind) は受動的にものごとを受容する一箇の実体であり、また心の「印象」(impression) が、諸々の偶然事から成る、心の私的世界を形成するという前提である。したがってこの前提をはずせば、あとに残るものはさらけ出された諸々の私的な偶有性と、これらを相互に結ぶ私的な、やはり心の偶有性であるところの諸関係だけとなる。しかもヒュームは、公言するところでは、心を実体とみなす見解を否認しているのである。

しかし、それでは「なぜならば……」と結ばれた引用末尾の一文の真意はなにか？「実在物、あるいは客体間の

諸關係」に関して「諸印象」は何ら論証上の効力をもたぬ、と断定している唯一の理由は、諸印象なるものは私的な偶有性にすぎぬとみなす隠れた信念にある。サンタヤナの著書『*Scepticism and Animal Faith*』についてはすでに言及したが、この書は初めの数章において、ヒュームの前提を採れば同一性・時・位置は実在の世界と何ら関りを持ちえないものと断定するはかなくなることを、みごとに例解に訴えて力づく徹底的に論じている。あとにはサンタヤナが『*solipsism of the present moment*』（この瞬間だけを信ずる唯我論）と呼ぶものしか残らなくなる。記憶さえも残りはない。なぜならば、記憶印象（*a memory-impression* 記憶トナッタ印象）なるものは記憶の与える印象（*刻印*）ではないからである。記憶印象は記憶とは別箇の直接的な私的印象にすぎないのである。

因果性に関するヒュームの見解を引用する要はない。さきの引用文がかれの懷疑論の立場を完全に伝えてくれるからである。だが、この点に関するかれの公然たる——散在している暗黙の諸前提とは区別すべき——教説の根拠を説明するために、実体を論ずる言葉の引用がひとつ必要である*——『実体と偶有性との区別に基づいて推論の多くを行い、これら両者について人間は明晰な観念を持つと考えている哲学者たち、この人びとに私はあえて尋ねたい。実体という観念は感覚の印象から導きだされるのか、それとも反省作用の印象からなのか？ この観念が感覚によってわれわれに伝えられるというのであれば、私は尋ねる、どの感覚によって、どのような仕方でか？ もし眼によって知覚されるとすれば、それは色であらねばならぬ。耳によるのであれば音、舌によるのであれば味であらねばならず、ほかの感覚によるばあいも同様である。だが私は実体をひとつの色、音、味とみなすような人がいるとは思わない。それゆえ実体という観念は、真に存在するとすれば、反省作用の印象から導きだされるものでなければならぬ。しかし反省作用の印象はわれわれの情熱や情動に帰着し、この種のものはいずれも実体を代表することはできない。したがってわれわれは、個々の性質の一集合という観念と区別できるような実体の観念を持ちはしない。また、実体に関

して語り推論するときにも、われわれはほかのいかなる意味をも持つことはないのである。』

＊原注『人性論』（第一書）第一部 第六節。

この行文は「実体」(substance)という観念を扱っているが、このような観念を私は採らない。そこでこの行文は間接的にはあるが、私の立場の論駁となっている。さて、この行文引用の理由はここにヒュームの主たる仮説がもっとも簡明に示されているからである。その仮説はつぎの二つである——「presentational immediacy」と「直接に呈示される諸実在物相互間の関係」とが知覚経験の唯一の種類を構成する。「延長をもつ現実的事物から成る同時世界、この世界を開示してくれるような論証的因子(demonstrative factors)を presentational immediacy はなにひとつ具えていない。——

ヒュームはこの問題を『人性論』の後段で「物体」(bodies)の観念という標題のもとに論じ、そこでも同じく懷疑論の諸結論に達している。ところで、これらの諸結論は時間を純粹継起とみなす極度に素朴な想定に由来する。この想定が素朴である所以はこのような見方が至極自然であるからであり、また、自然である所以は「事物ノ中へ」内密に織りこまれていたために無視するのが普通となっている時間の特性を、ここでも、まさに無視しているからである。われわれにとって時間は経験というわれわれの諸行為の継起として、したがって派生的には、これら諸行為のうちに客体として知覚されゆく諸事象の継起として知られている。しかし、この継起は純粹継起ではない。この継起は状態から状態が出生すること(the derivation of state from state)であり、そのさい後続の状態は先行状態への順応合致(conformity)を示してゆく。具体物に具わる時間とは状態から状態への順応であり、後続状態が先行状態に合致してゆくことである。他方、純粹継起なるものは既定の過去と、そこから生じた現在との不可逆的關係から「事象ノ具体性ヲ捨象シテ」得られた一箇の抽象である。純粹継起の観念は色の観念と類比される。単なる色というものはなく、

つねに赤、青など特定の色が存在するわけだが、これと同じように純粹継起というものはなく、つねに何らかの特定の地盤 (some particular relational ground) すなわちこれと関連させてみると諸項が相互に継起していることになるような「諸項相互ノ関係ヲ成立セシメル」関係的地盤が存在するのである。整数は一定の仕方で相互に連続し、諸事象もまた別種の仕方で相互に継起している。このような継起の仕方の方の「具体相ノ」抽象を行えば、得られるものは純粹継起という二次的な一箇の抽象である。すなわち、時の時間的性格 (the temporal character of time) や整数の数的関係 (the numerical relation of integers) を排除した類的な抽象である。過去とは既存既定の諸行為の共同体 (the community of settled acts) から成っており、これら過去の諸行為は現在の行為のなかへと客体化されてゆくことにより、この現在の行為が順応合致してゆかねばならぬ諸条件を確立していることになる。

アリストテレスは「質料」(matter, *μάτηρ*) を、現実となるために形相の incoming を待つ純粹可能態 (pure potentiality) とみた。そこでアリストテレスの諸概念を藉りれば、つぎのように言うこともできよう——既存の過去が「客体化されること」(objectifications) によって純粹可能態は確定されるとともに限定を受けることになる。「第一章第五、八、一三節ニオイテ論ジタヨウニ」現在の場合 (the present occasion) がおのれを創りだす際の最初の局相として、われわれは原初的な実現されたばかりの形式を想定した。ところで上記の限定とは、この形式「マタハ形相」(form) という基底を得た「質料」にほかならぬ「自然的可能態」——自然における可能態 ('natural potentiality'—or, potentiality in nature)——を表わしたものである。ここで用いた「純粹可能態」という概念はアリストテレスの「質料」に相当し、「自然的可能態」とは現実の事物一つ一つを生ぜしめる形式 (形相) を賦与された「質料」である。経験「成立ノタメ」に与えられている一切の構成要素はこの自然的可能態を分析すれば見出されるはずである。このようにみると、この瞬間の現在はおのれにとって過去であるものに順応合致せねばならず、時の単なる経過なるものは、はるかに具

象的な「順応合致」(conformation)の関り合いから抽出された一箇の抽象にすぎないことになる。現実の事物の「実体的」性格('substantial' character)は、第一義的には、諸性質を陳述することによって定まるものではない。この性格が語るところは、「先述ノ」自己創出活動に際して「(後続ノ状態ハ)既存現実の事物一切に正しく順応合致してゆかねばならぬ、という不屈の事実である。「不撓不屈の事実」('stubborn fact')という語句は、上記の特性にひとびとが気附していることをよく言い表わしている。現実の事物がそこから一つ一つ生じてくる原初的局相とは、各々の現存の底に横わる、この不屈の事実である。不屈の事実などは存在しない、とヒュームは言う。このヒュームの教説はみごとな哲学ではあろうけれども、まちがいに常識ではない。言いかえれば、明証という究極の吟味にかけてみると、この教説は崩れるのである。」

本節第一段は、本書の論題の基本構想を略述して、シンボリズムの根拠の所在を強調している。相互に独立する知覚二様態の関連づけに「未来へ向う pragmatic appeal」の概念を導入していることは、二十世紀英米の新實在論(new realism)はプラグマティズムの影響下に起った、とみる一般の理解の裏づけにもなっている。

さて第一章における presentational immediacy の説明をうけて、本章の前半は causal efficacy の検討に費される。causal efficacy の概念は、さしあたり、因果性とおきかえて理解してよいものであろう。ホワイトヘッドはヒュームの経験論、カントの先験論的観念論を相手にえらび、それぞれの因果性論議を批判しつつ、おのれの立場を鮮明にしようとするからである。

第一の引用文はヒュームが因果律批判にふみ込む最初の言葉である。かれは一切の関係を整理して、哲学的に論及しうる関係(philosophical relation)を七つに集約した。すなわち、類似、同一、時・位置の関係、数・量の割合、質

の度合、反対、因果という七関係である。これらのうち、類似、反対、質の度合、数・量の割合という四関係は概念 (ideas) 外官たる感覚の印象および内官たる反省の印象によって与えられるもの。ロック以来英国経験論が立論の冒頭に扱う知識の基礎) にのみ依拠しているゆえに、知識および確実性 (knowledge and certainty) の客体であり、科学の基礎である。だが、同一、時・位置の関係、因果という三関係は觀念に基礎をおいたものではない。したがってこれら三関係の取扱いは用心せねばならぬ。このように論じてヒュームは引用の文に移ってゆき、ここでは、三関係のうち哲学的に詳細な吟味を要する関係は因果性だけであることを指摘する。ついで、その後の長い論議によって因果性否認の懷疑論に到達するわけである。ホワイトヘッドはこの一文をとらえて、ここにすでに、ヒュームが懷疑論へ落ち込む必然性を読みとっているが、その説得は簡略にすぎ、結論からの推断と思われて、私には納得のゆくものではない。

「実体」の觀念を扱った第二の引用文の批判にも私は同様の感想をもつ。しかし、ホワイトヘッドの理解に努めてゆくべきわれわれとしては、かれのヒューム批判の当否を措いて、さきへの展開を見ることが許されるであろう。かれはヒュームが懷疑論へ落ち込む原因をその時間論にあるとして、これを批判しつつ、積極的におのれの思想を述べているのである。

ホワイトヘッドは時間を純粹継起とみなす見解を斥ける。徹底せる實在論(第一章第六節)を自ら公言した者として当然の態度であろう。ホワイトヘッドによれば、時間はまず経験主体の諸行為の継起、およびこの主体のうちに知覚される客体的諸事象の継起という具体的なものである。ところで自然は真空を拒み飛躍を厭う。したがって継起は、必ず、後続状態が先行状態に順応合致するという在り方をとらねばならない。このように、時間をあくまで具体物に具わるものとして把え、その推移の破綻なき継起に注目すれば、「順応合致」(conformity; conformation)の觀念にゆき

つくのは必至と言えよう。そしてこの順応合致の觀念こそはホワイトヘッドの用語 causal efficacy の内実にはかならない。かれは、外界に実在する一切の事物が、つねにいささかの破綻もみせず確実に進展推移しており、この事実が自然科学の確固たる基礎でもあることを顧慮しつつ、ヒュームを排して causal efficacy に揺ぎなき信念を懷く者であらう。

アリストテレスへの言及はホワイトヘッド自身がアリストテレス形而上学の実在論的性格に親近感をみせている証左と受けとられる。この箇所では和訳に苦しみ、いまなお若干の懸念を覚えるので原文を掲げておく。――

Aristotle conceived 'matter' *-ἕκτ'* as being pure potentiality awaiting the incoming of form in order to become actual. Hence employing Aristotelian notions, we may say that the limitation of pure potentiality, established by 'objectifications' of the settled past, expresses that 'natural potentiality'—or, potentiality in nature—which is 'matter' with that basis of initial, realized form presupposed as the first phase in the self-creation of the present occasion.

右の原文には、第一章のなかでホワイトヘッド自身の思想を力説した箇所の用語、表現がそのまま移されている。この事実を熟慮して、私は意識に過ぎると非難されかねない積極的な翻譯を行った次第である。私の抱えた原文の真意を詳説すれば、すでに行った説明をくり返すことになる。訳文中「」内に記しておいたように、第一章第五、八、一三節の注解をご検討いただければ幸いである。

なお本講演が行われたのは一九二七年、ドイツではハイデガーの「*Sein und Zeit*」の著された年である。本節の「事物ノ中へ内密に織りこまれているために無視するのが普通となっている時間の特性」あるいは「各々の現存の底に横わる不屈の事実」という言葉に窺われる洞察の姿勢に、私は当時の哲学に共通の関心事を感じざる者であるが、も

とよりこの問題はこのような小講演をとらえて論すべき事柄ではない。ただ後日ホワイットヘッドの存在論へと赴く時があらば、注目すべき一つの視点としてハイデガーとの比較を扱ってみたいと思う。私自身に対する問題提起としてここに記させておいていただく。

二、カントの causal efficacy

カントに導かれた先験論的観念論者の一派は causal efficacy が現象界の一因子であることを容認する。だが、これは知覚の前提たる純正な所与には属さず、逆に、所与に関する思惟の仕方に帰属する、と考えている。知覚した世界を意識するとき、この意識はわれわれに一箇の客体的体系をもたしめてくれるが、このような体系は純然たる所与とかかる所与に関する思惟の様態とが合体したものだ、と言うのである。

カント主義者がこのような立場をとる理由はおよそつぎの通りである。——直接的知覚がわれわれに一つ一つの事実を告げてくれる。ところで個別的な事実とは個別的所与として単独に生起するものである。しかもわれわれは一切の個別的事実には普遍的原理があると信じている。この種の普遍的知識は、一つ一つの事実はまさに単独に生起するものであるからには、どのような選択を行おうとも個別的な諸事実から導くことはできない。とすれば、右の根深い信念を説明しうる途はただ一つ、つぎのような教説、すなわち、意識に把握されるとき個別的な諸事実は純然たる所与と思惟とが合体せるものとなっており、思惟はこのとき範疇に従って機能するわけだが、範疇はおのれの普遍性を諸様態に分類された所与に注入する、という教説を採るほかない。このようにみると、意識の内に把握された現象界とは、思惟の先天的な範疇に従って枠組を与えられた諸判断の一複合体であり、これは先天的直観形式の纏めた諸々の所与が構成せる内容をもつことになる。——

カントのこのような教説はヒュームの素朴な仮説、すなわち純然たる所与を「単独生起」(simple occurrence)とみなす見解を受け容れている。私は本書外の所で、この種の見解は時間だけでなく空間にも応用されるものとみて、これを「単独所在」(simple location)の仮説とも名づけておいた。

私はこの「単独生起」説を真向から否定する。「単独純粹に生ずる」(simply happens)ようなものは一つとして無い。それを有ると信ずるのが、時間を「純粹繼起」とみなす無根の教説である。これに代って、時間の純粹繼起なるものは順応合致という根源的關係から抽きだした一箇の抽象にすぎぬとみなす教説は、われわれが外界を直接把えてこれに形姿を与えてゆく際に、構成的思惟乃至は構成的直観の介入する余地を一切払拭してしまう。真理の普遍性は相關性(相対性)という普遍性(the universality of relativity)から生じてくる。この普遍的な相關性があればこそ、現実の個々の事物は皆それぞれ、おのれに順応合致することを、義務として全宇宙に強いているのである。したがって特定の事物を分析すれば普遍的な諸真理は発見し得るし、これらの真理とは右の義務を表したものにほかならない。経験に与えられたもの(the givenness of experience)——すなわち一般的真理であれ、個別的感覺であれ、あるいは兩者綜合の諸形式と想定されるものであれ、ひとしく経験の与件の一切——は、当の経験行為が全条件の源泉たる宇宙の既存現実態に対して結ぶ時間的關係の、種的な特性を表現している。「具体性を誤り与えてこれを信ずる」(misplaced concreteness)という誤謬は、時間からこのような種的特性を捨象して、純粹繼起という類的特性だけを時間に賦与するのである。」

ヒュームに対する批判の論鋒はつづいてカントに向けられている。さて、かつて高橋里美博士は批判的實在論の觀念論に対する態度をつぎのように説明された。「素朴實在論は理論以前のものであるが、科学的實在論と雖も十分に

批判的なものではない。それらのものに於いては、未だ本来の意味での認識論的反省といふものが始まつてゐないのである。この反省は二つの方向を取つて現れる。一つの方向は批判的實在論に導き、他の方向は觀念論に導く。尤もこの二つの方向が、素朴的實在論から同様に直接に現れることは固より可能である。然し大体からいへば、素朴的實在論又は科学的事実論に対して先づ起るのは觀念論であつて、批判的實在論は寧ろ觀念論に対する反動として第二次的に起るのである。それ故に、批判的實在論の批判は、素朴的實在論や科学的事実論に対する批判であることは勿論であるが、同時に、寧ろより以上に觀念論に向けられてゐるのを常とする。『認識論』岩波書店 昭和十三年。一七六一七頁。先述のようにホワイトヘッドはこれを徹底せる實在論者（第一章第六節）と宣明した。しかも本文にみるようにカントを先驗論的觀念論の祖とみなしている。この観点からすれば、高橋博士の説明から窺えるように、カント批判はホワイトヘッドにとって不可避の作業であつたと考えられる。

批判の骨子はヒュームに対するばあいと同様であり、カントがヒュームから受けついだとする「単独生起」説を否認し、ついで時間を「純粹継起」とみなす見解を抽象的作為として斥けるのである。だがこのカント批判の可否もやはり別の機会に譲るべきであらうし、ここでは先をいそぎたい。

「III' causal efficacy」の直接的知覚

知覚についての思惟に先行するのは直接的知覚である、という意味で「causal efficacy」ヲ思惟シウルカラニハ、マズ「causal efficacy」の直接的知覚もあるとする見解、このような見解に対して、右にみたようにヒュームおよびカントの追隨者は互いに異なつてはいてもなお同類の反論を唱えている。両学派とともに「causal efficacy」とは、所与について思惟し判断する一定の仕方を所与のなかへ移入したものとみなす。これを一派は思惟の習慣と呼び、他派は思

惟の範疇の一つと呼ぶ。また両学派にとつて単なる所与とは純然たる感覚所与となっている。

もしもヒューム、カントのいずれかが causal efficacy の所在を適切に説明しているのであるとすれば、われわれはつぎのようにみなくてはなるまい。causal efficacy を自覺的に感知することは、ある程度、当面の瞬間の感覚所与に向う思惟もしくは純粹直覺的識別力の活気に依存する、と。思惟の所産たる感知は思惟が後退すれば重味を失うからである。またこのようなヒューム・カントの説明にしたがえば、当の思惟とは直接の感覚所与についての思惟である。それゆゑ感覚所与が、直接の現前に際して、ある生々しさを具えもつことは causal efficacy の感知にとつて都合とみるべきであらう。かれらの説明にしたがえば、causal efficacy とは、presentational immediacy に与えられた感覚所与についての、思惟の仕方の一つにはかならないからである。このようにみると、思惟を抑制すること、感覚所与が模糊たることは、ともに、経験の一要素としての causal efficacy が浮び出ることにとつて極度に不都合と言わざるをえなくなろう。

causal efficacy の直接的知覚は論理的に困難、とする根拠が、時間は純粹繼起の類的概念にすぎぬとみる全くの仮説にあることはすでに示した。これは先の「具体性を誤り与えてこれを信ずる」という誤謬の一例である。こうしていまや causal efficacy の感知が実際に感覚所与の生々しさに基づくのか、それとも思惟の積極的活動に基づくのか、を経験的 (empirically) に探究する途がひらけているのである。

両学派にしたがえば、causal efficacy が重要となり、さらには causal efficacy の想定を裏証してくれる作用が重要となるのは、高度組成体がその本領を発揮しているときの特性による、としなければならぬ。さて、もしも広く隔たる原因と結果とを複雑な推論によつて結びつけることだけに注意をしばらくとすれば、ここではたしかに高度の心性と感覚所与の精確な識別とが疑いもなく要求されよう。けれども、そのような推論過程の一々の段階は、この瞬間

の現在は直前の過去が設定した環境に順応合致せねばならぬ、という大前提に依拠している。昨日から今日へ、いや五分前からこの瞬間の現在へ、というような〔距離ノ大キイ〕推論に注目してはならぬ。この瞬間の現在を直前の過去との関係において考えねばならない。この瞬間の作用をみれば、事実 (Fact) は先行既定の事実¹に有無なく順応合致することが判明するであらう。

このような現在の事実と直前の過去との順応合致は、外に現れた行動においても意識の裡においても、組成体が低級であるほど顕著である、というのが私の主張である。花は人間よりもはるかに確実に光へ向う。また石は花よりもはるかに確実に外部環境の定めた条件に順応合致する。犬は人間同様の確実さを以て、直後の未来を現在の活動に順応合致させようと予期する。計算とか長い推論になると犬にはできない。だが犬でも直後の未来が現在と無縁であるかのように振舞うことは決してない。行動における不決断とは、〔現在ニ〕関連をもつやや遠隔の未来を意識しながら、この未来の精確な姿を評価しえないときに生じてくる。このような関連性を意識しないとすれば、どうして危急の際に不決断がみられたりしようか？

また直接的な感覚所与の生々しい享受が、関連する未来の感知を妨げることはよく知られている。このばあい現在の瞬間が一切となり、これが意識の裡で「単独生起」に近似してくるわけである。

怒りや怖れなど、ある種の情動は感覚所与の感知を妨げやすい。だが、これらの情動が起るのは、直前の過去が現在に、あるいは現在が未来に対してもつ関連を生々しく感知するときにはかならない。また身近な感覚所与が抑えられると、何か漠然としたものを恐れる感覚がめざめ、良かれ悪しかれ、その後の運命に影響を与えてゆく。日中活動を習性とする多くの生物は、慣れ親しむ感覚の所与が暗闇のなかで見えなくなると、はるかに臆病になる。だがヒュームによると、因果の推論を可能にするのは、まさに感覚所与に慣れ親しむことであつた。とすれば、暗闇のなか

で、眼には見えずとも影響を与えてくる何ものかの現存を感じとる、などということとは、ヒュームが起るべきとみた事柄に正反対の事態なのである。」

causal efficacy に関するホワイトヘッドの根本思想はすでに第一節に明示されていたと思われる。この第三節ではかれはヒューム批判（第一節）カント批判（第二節）を要約し、両者共通の観点をおのれの見地の対極として、先述の自説を具体的例証に訴えて語り直している。だがここで、causal efficacy の知覚は低級組成体においていよいよ顕著である、という独得の見解が主張される。犬、花、石の在り方に即した具体的叙述によって、その主旨はほぼ了解されるが、causal efficacy なるものを因果律として把握する常識の立場にとっては、なお抵抗の大きい見解であろう。それゆえ次節では詳論がなされている。

「四」 causal efficacy の原初性

環境内の諸々の実在物への順応合致を知覚することは、われわれが経験をもつ際の原初的要素である。われわれはおのれの身体諸器官に順応し、またこれら諸器官のかなたに横わる漠然の世界に順応する。原初的知覚とは「順応合致」を漠然と知覚することであり、さらに、識別以前の背景のなかで「自分自身」「他者」という一層漠然とした相関項を知覚することである。勿論、関係の知覚は不可能とすれば、このような教説は理論的根拠からみて排斥されねばならない。けれどもこの種の知覚を是認すれば、順応合致の知覚はどの点からみても原初的要素となる。われわれの経験の一部は扱いやすいものであり、明確に意識される。またこれを意のままに再現することは容易である。だがこれと別種の経験は、執拗ではあっても漠然と取りつく類のもので、統御しがたい。前者の種類はいかにきらびやか

な sense-experience (感覚経験) に充ちていようと不毛である。これがみせるのは世界であっても、われわれ自身の身体が演出した偶々の見世物世界である。後者の種類は、過ぎゆく事物、すなわちその時々のわれわれの自己に圧力を加える諸々の事物と交渉を保つゆえに重々しい。この後者の種類、causal efficacy の様態こそは原初的な生物組成体——おのれの生い立ってきた運命、向わんとしている運命を何らか感じとることができ、前進後退は行いうるが、この瞬間に現出して見えているものを一々区別することだけはむずかしい組成体——を支配している経験である。これが重々しい原初的経験である。前者の種類、presentational immediacy は複雑微妙な表層の所産であり、いつも現在に固執して、事物の直接的外見から統御しやすい自己享楽をひきだしてはこれに耽っている。事物はみな本来の諸特性を具えている。ところでわれわれの生涯において、これら諸特性がふしぎにもわれわれ自身の本性を形成するほどまでに、事物世界の圧力の強く知覚される時期があるが、このような時期は何らかの原初状態への回帰が生みだすものである。人間なる組成体の何らかの原初的機能が昂まるとき、あるいは習慣となつていゝ sense-perception (感覚知覚) のかなりの部分が異常に弱まるとき、これらいずれかのばあいには、そのような回帰が起つていゝ。

怒り、憎悪、怖れ、驚愕、魅惑、愛、飢え、熱意、大きな悦楽などは「——から退く」(‘retreat from’) 「——へ向いすすむ」(‘expansion towards’) という原初的機能と緊密にからみ合う感情であり情動である。これらは、高度組成体にあつては、右記のごとき原初的様態の機能がおのれを支配していると生々しく感知することに伴う状態として生起する。だが「——から退く」「——へ向いすすむ」という機能は、空間的に細かく分たれゆく差異をすべて取りさつてしまうと、外界がその特性をわれわれに刻印してくる仕方に対するわれわれの反応にすぎない。単なる主観性からの後退などということは起りえない。主観性とはわれわれがみずから担いはこぶものだからである。しかも通常、われわれは自分の身体の内部諸器官についてはほとんど無視してよい程度の sense-presentations しかもたないから

である。

右に挙げた諸々の原初的情動に伴うのは、実際にわれわれに反応しつつある事物をきわめて鋭く認知することである。どれでもよい、五感の一つが働いて生みだすものはありふれて明白であるが、右の認知のありふれた判りやすさはこれに匹敵する。憎むとき、われわれの憎むのはひとりの人であって感覚所与の一集合ではない——因果で結ばれ効果を發揮する人 (a causal, efficacious man) を憎むのである。「順応合致」の知覚がこのように原初的に明白であることは、諸々の生起の実用的側面 (the pragmatic aspect of occurrences) を強調すればよく説明されよう。そしてこの側面の強調は現代の哲学思想にきわめて著しい。生成中のものにとって既成のものは決定因子となる——これが順応合致の原理であるが、この原理を容認しないとすれば、およそ有用な側面 (useful aspect) などというものはありえない。実用的側面が明白であるということは、順応合致の事実の知覚が明白であることにすぎないのである。

現在が直前の過去に順応合致する事実をわれわれは実際には決して疑わない。この事実は経験なるものの究極的素地に属しており、presentational immediacy と同様に明証を具えている。現在の事実は明かに例えば四分の一秒ほど先行する諸事実の帰結である。不測の因子が介入していたかもしれない——ダイナマイトの爆発があったかもしれない。だがどうあろうと、現に直前の過去がもっていた本性は現在の事象に諸限定を課しており、現在の事象はこれらの限定に従いつつ生じている。ダイナマイトが爆発したとすれば、現在の事象は過去の帰結であって、しかもダイナマイト爆発と矛盾せぬ態のものである。さらに、われわれは推論を逆方向にとつて、ためらいなくつぎのように言おう——過去を完全に分析すれば、そのなかに、現在を生む諸条件を準備した諸々の因子を見出せる。いまダイナマイトが爆発しているとすれば、直前の過去にはダイナマイトの火花があったはずである。

われわれの意識 (our consciousness) が向うのは現在の経験の分析にとどまる、という事実はむずかしい問題ではな

い。なぜならば、個々の現実的事物の普遍的相関性（相対性）を説く理論は、経験のこの瞬間と「経験成立ノ瞬間ノ」同時世界の知覚とを区別するようになるからである。前者は意識的分析にとつての唯一の所与であるが、後者はこの唯一の所与における因子である。

presentational immediacy が比較的に空虚であり、causal efficacy が深刻な意義を露呈する、という両者の対比が根底となつて、世界には悲哀 (pathos) がこめられている。

‘Perent et imputantur’

これは修道院 (in ‘religious’ houses) などによくみられた古い日時計の銘である。

‘The hours perish and are laid to account.’

(時がいつか滅びては、その責を問われゆく。)

こゝで ‘perent’ (カレラハ過ギユク) は immediate presentation のうちに露わとなる世界をさしている。千変万化の色どりにきらびやかではあるが、束の間に過ぎゆく本来的に無意味な世界である。他方 ‘imputantur’ (カレラハ算入サレル) は causal efficacy の面から露わとなる世界をさしている。ここでは各々の事象がそれぞれ個性を具えていて、良かれ悪しかれ、来るべき世代に影響を与えてゆく。およそすべての悲哀は時の推移への論及を含むものである。

キーツの詩 *Eve of St. Agnes* の最終聯は忘れがたい詩行ではじまる——

And they are gone : ay, ages long ago かくてかれらは去りゆきぬ、ああ幾とせの昔ぞ

Those lovers fled away into the storm. かの恋人ら嵐のなかへと逃げ去りぬ。

ここではひとつの強烈な情動が、知覚の二様態を想像力のなかで溶融させ、そこに時の推移を想う悲哀が湧き出ている。シェイクスピアは、近代世界の春といえる時期に、直接触れうるものの感化力に富む華かさを描きつつ「知覚

ノ〕二要素を融合させた――

.....daffodils,

黄水仙、

That come before the swallow dares, and take

つばくろもなお現れぬ日に咲き出づ

The winds of March with beauty;.....

美しく弥生の風をとらえゆく

(*The Winter's Tale*, IV, iv, 118-120.)

だが、ひとは時に事物の本性の因果的要素にひたすら視線を注いで過労となる。このような疲労の瞬間に突如弛緩が生じ、眼に映る世界の表面だけがその空虚を痛感させることがある。フランス革命戦争という暗黒期の英国宰相ウィリアム・ピットは、英国の戦禍最悪の危機に死の床に就き、そのつぶやきが洩れ聞かれた――

‘What shades we are, what shadows we pursue!’

(われらは何という蔭だ、何という影を追うことか！)

かれは突然に causal efficacy の感覚を失ってしまったが、そのとき sense-presentation のうちに移ろいゆく世界の不毛な空虚を見るに及んで、おのれの生涯を蔽ってきた強烈な情動が対比的に蘇り、これがかれの精神を照したのである。

sense-presentation に与えられる世界は、決して、低級の組成体も生来具えていて、のちに causal efficacy の推察を行えば成熟をえるというような経験ではない。事態は逆である。まずは経験の因果的側面が支配し、ついで sense-presentation が微妙さを加えてゆく。そして最後に「これら〔知覚ノ二様態〕相互間の symbolic reference を意識および批判的理性が除去するのは「symbolic reference ヲ行ウ者ノ」帰結をめやす実用的な狙い (a pragmatic appeal to consequences) を助けとしてのことである。」

くり返して記すが、ホワイトヘッドはおのれを徹底せる實在論者（第一章第六節）と宣明した。ところで實在物は単一の素粒子から成るものではなく、原子でさえも複合的な組成体として存立する。實在論の立場からすれば、世界は知覚主体の自覚の有無を問わず、いささかの破綻も間隙もなく諸實在物内外の有機的聯関を以て構築されていなければならない。このような世界観・宇宙観が本書に述べられている教説の大前提である。とすれば、知覚主体が自覚をえて立ち現れてきたときにも、おのれの存立のためにまず知覚せねばならぬ厳然たる対象は破綻なき有機的結合の在り方ということになる。この結合乃至は關係の知覚が可能であるか否かに一切がかけられており、本節第一段「關係の知覚は不可能とすれば、このような教説は理論的根拠からみて排斥されねばならない。」（if relationships are unacceptable, such a doctrine must be ruled out on theoretic grounds.）の明言をみるのである。ホワイトヘッドは關係の知覚を可能であると断じ、實在物一切の有機的結合のなかにおのれの位置を確保存続させてゆくためには、この知覚こそ原初的な意義をもつと考えるわけである。このばあい、すでに幾つかの箇所で見えてきたように、ホワイトヘッドの「知覚」(perception)とは独自の概念であり、決して動物固有の機能ではなく、花でも石でも、およそ宇宙に遍在する一切の實在に具わる機能とされていることに注意せねばならない。この特異な前提を容認することができさえすれば、ホワイトヘッドの論旨は理解されるであらう。

知覚は causal efficacy と presentational immediacy の二様態に區別されたが、關係の知覚を行う causal efficacy の様態が深層に迫るものであり、presentational immediacy の様態は瞬間瞬間の外見を越えぬけられず表層の知覚にとどまるものとみなされる。またそれゆえに、前者は一切の組成体が必ず具える機能であるが、後者は高度組成体としてはじめて具える高級な機能と考えられることになる。

さて、高度組成体とりわけ人間は複雑な感情(feelings)や情動(emoions)をもつ存在である。知覚と深くかわる

感情や情動の本質はどのように捉えられるか。本節後段の関心はこの問題に向けられている。ふり返ると、英国経験論の系譜では早くもホッブズが今日の行動主義的観点を先取して簡明な情念論を示していた。その基本的構想は『リヴァイアサン』第一部「人間について」第六章「有意的運動の内的原動点、一般に情念と呼ばれるものについて。またこれを表現する言葉」(Of the Interior Beginnings of Voluntary Motions; commonly called the *Passions*. And the *Speeches* by which they are expressed.)に記されている。ホッブズによれば動物特有の運動には二種ある。vital motion は生物学的機能で、これは imagination (想像)を要しなず。animal motion は voluntary motion とも呼ばれ、まず脳裡に想像される行動である。この想像こそは有意的運動の内的初発点であり、「歩く」「話す」「打つ」などの目にみえる行為となって現れる前に、肉体内部で始まるこのような想像上の動きを endeavour (努力)と呼ぶ。努力は、これをひき起した対象へと向うとき (when it is toward something which causes it.) には appetite; desire (欲望)であり、逆に退くとき (is forward something) には aversion (嫌悪)である。欲望・嫌悪は対象が実在せずとも生起するが、対象が実在するときにはそれぞれ love (愛)・hate (憎悪)となる。また欲望の対象は good (善)であり、嫌悪の対象は evil (悪)である。pleasure (快)は善を感じることである。事物の目的・結果を予見して生ずる期待に伴う精神の快が joy (喜)であり、この対極が grief (悲)である。そしてこれらの二系列、一方には appetite; desire, love, joy, 他方には aversion, hate, grief と並ぶのが simple passions (単純情念)であり、基本的な情念である。多種多様の事態にさまざまな情念の名称が用いられるとしても、それらは単純情念の複合体に与えられた呼称にはかならないのである。——本稿序文に述べたように、人間をひたすら感性的存在として新たに照明し、この基調を崩すまいと努めたところに近代思想の特質の一つがあろうが、ここにもその端的な例を認めることができよう。何ものかに対する fromward と toward と、姿勢に情念の起源を確定したホッブズの簡明な構図は、その後ロック、ヒュー

ムなどにひきつがれ、やがてパークにいたると同一基盤の上に「崇高」「美」の存立が論じられて、近代的な美的範疇論がひらかれることにもなる。

それはさておき、ホワイテヘッドの本文にみられる retreat from, expansion towards はホッブズに通ずるものであり、まさに英国経験論の継承にはかなるまい。そして、長い伝統の上に加えられた独自の点は、反応を起すべき対象におのれの説く causal efficacy の知覚様態をおいたことにあろう。外界に対する知覚の反応が決定的なのであって、それゆえかれは情念を単なる主観性の問題として処理する見解を否定するわけである。なお本文中「憎む」を例にひいた際の表記 a causal, efficacious man (因果で結ばれ、効果を発揮する人)の一句には causal efficacy なる概念の含蓋するところがよく窺えるであらう。

本章第一節にもすでに言及があったが、ここでも causal efficacy に関連してプラグマティズムの観点が、現代思想の特徴であるという指摘を添えて、援用されている。およそものの「有用」(useful)とは、何ごとかを果そうと志してこの未来に役に立つということであり、これは「順応合致」(conformation)の原理が容認されるからこそ成立つ。しかも順応合致の事実が明々白々に知覚されつつ日々「有用」を意義あるものにしていくではないか、というのが論旨である。

以上、感情・情動の原理については一応論じられたが、高度組成体としての人間は意識を具えており、知覚の意識があればこそ感情・情動も生起するのであろう。それでは意識と知覚対象との関係は、とくに意識がつねに現在に固執するものとすれば、どうなるのか。この問題も知覚二様態の弁別によって処理される。第一章第一二節は感覚所与と空間とを論じた箇所であったが、そこではつぎのように明記されていた。一、感覚所与は知覚主体と知覚対象との空間関係に依存している。二、知覚成立のとき、世界は諸々の組成体の充溢した空間として現出する。三、presenta-

tional immediacy は高度組成体の特性である。この三項目に要約された思想が、本節の意識を論じている箇所背後には横わっている。その例解はすでに行ったつもりであるから第一章第一二節の当該箇所をご検討いただきたい。意識は高度組成体の特性として、外界に対してはまず presentational immediacy の知覚様態を捉える。だがこの知覚成立の瞬間に現れ出てくる世界は破綻なき有機的聯関であって、やがてはこれも causal immediacy の様態を以て知覚されることになる。それにしても、意識の瞬間を考えれば、捉えられるのはあくまで前者であって、その一因子としてのみ世界の姿も垣間みられる、とホワイトヘッドは説くのである。

presentational immediacy は高度組成体の特性であり、千変万化を与えるものではあるが表層にとどまり空虚である。これに対して causal efficacy は深層にひそむ意義を露わにする。くり返し強調されるこの見解に基づいて、本節の終結部では悲哀(pathos)について興味ぶかい洞察がなされている。ホワイトヘッドによれば悲哀とは知覚二様態の対比を基盤におく特殊な情調である。古い日時計の銘が日常的な例証として挙げられ、つづいて causal efficacy の自覚から悲哀を醸し出した詩人キーツが注目される。キーツに対しては、presentational immediacy の華かさを巧みにとらえているシェイクスピアの例を挙げ、最後には虚構の領域ばかりでなく、実在人物の感慨が同一の観点から解明されている。

このような具体例に即して知覚二様態の交錯の在り方が照しだされたわけであるが、これら二様態を相互に結びつける作用が symbolic reference にはかならない。この作用の果に、意識および批判的理性(the critical reason)が両様態の結合を完了させてこれを固定させるとき、真理認識が生じ、その際、未来を考慮する実用的な狙いが関与する、とホワイトヘッドは考えるようである。真理については明かにプラグマティズムの立場をとるのであろう。つづいて次節では本節末尾に触れられた symbolic reference が論題となる。

「五、知覚」様態の交錯

一様態から得られる知覚対象と他様態から得られる知覚対象との間には、何らかの仕方であらゆる対象の交錯がなければ symbolic reference はありえない。かかる一対の知覚対象が共通の構造要素をもたねばならぬことを私は「交錯」(intersection)と呼ぶ。対をなす知覚対象は構造要素を共有すればこそ symbolic reference という作用の目標となるのである。

presentational immediacy, causal efficacy の各々から得られる知覚対象が共有しうる共通構造には二つの要素がある。〔一〕感覚所与 (sense-data) 〔二〕所在地 (locality) という二要素である。

所与は与えられる (given-ness) とみたことはヒューム、カントの大教説の共通項である。しかしながら、経験〔成立ノタメ〕にすでに与えられているものは自然的可能態からのみ得ることができるのであり、自然的可能態は causal efficacy の装いをみせて独自の経験を形づくっている。causal efficacy は既定の過去が現在をつくる際に働く手である。それゆゑ感覚所与は知覚において二重の役割を演じているはずである。〔一〕presentational immediacy の様態において感覚所与は〔客体ニ〕投射されて〔経験ノ瞬間ノ〕同時世界の空間的諸関係を見せてくれる。〔二〕causal efficacy の様態において感覚所与はまさに直前の瞬間に身体諸器官がそれぞれの特性を当の経験に賦課してゆくさまを見せてくれる。絵を見るとき、われわれはおのれの眼で見る。木に触れるとき、おのれの手で触れる。バラの香を嗅ぐとき、おのれの鼻で嗅ぐ。鐘の音を聴くとき、おのれの耳で聴く。砂糖を味うとき、おのれの舌で味う。身体感覚のばあい二つの〔知覚様態ノ〕位置は同一である。足は痛みを与えていると同時に痛みの所在地でもある。ヒュームはさきに挙げた第二の引用文で、この二重の関連づけ (this double reference) を暗黙の裡に主張していた。『もし眼

によって知覚されるとすれば、それは色であらねばならぬ。耳によるのであれば音、舌によるのであれば味であらねばならず、ほかの感覚によるばあいも同様である。』という。このように、因果性の知覚はないと断言しておきながら、ヒュームは言外にはこれを前提することになる。なぜならば、「眼によつて」「耳によつて」「舌によつて」などの「よつて」(by)とは何を意味しているようか？ すなわち、presentational immediacyにおいて機能する感覚所与は、causal efficacy において機能する「眼」「耳」「舌」のお蔭で「与えられる」、というのがヒュームの議論の前提である。この前提がなければ、かれの議論は理のない後退に追いこまれてしまう。ふたたび眼・耳・舌について論じなければならず、つづいて、議論の主旨を破壊せぬようにして「よつて」および「(あら)ねばならぬ」(must)の意味を説明しなければならぬからである。

上記二重の reference は知覚の生理学全理論の基礎である。だが当面の考察においては、この理論の詳細は哲学的にみて不要である。さて、その基本点をヒュームは天才の明晰を以て述べていたわけである——経験の一行為において機能する感覚所与は、現に作用する身体諸器官の causal efficacy によつて与えられることを明している。と。かれは直接的知覚の一構成要因としてこの causal efficacy に言及している。ヒュームの議論はまず暗黙の裡に知覚の二様態を前提し、ついで暗黙の裡に presentational immediacy が唯一の様態であると仮定した。ならにヒュームの追隨者はいかれの教説を展開するにあたって、presentational immediacy が原初的であり causal efficacy はそこからひきだした精妙なものにすぎぬと前提した。これは明証を完全に倒置することであった。ヒューム自身の教説に関するかぎり、勿論、別の見方が成立つ。すなわちヒュームの究極の見地を弟子どもが誤解した、とみるのである。このように仮定すれば、ヒュームが最後には「思惟ノ」「習慣」(practice)に訴えたことも、ありふれた経験の解釈に用いられた当時流行の形而上学的諸範疇の妥当を反論することにあつた、とされよう。ヒューム自身の信念をこのよう

に説くことはむずかしいと私は思う。けれどもなお、このような意味においてこそ、おのれの哲学的業績についてのヒューム自身の評価をはなれて、かれを最大の哲学者の一人として尊敬しなければならないのである。

これまでの議論はつぎのような結論を得る。およそ感覚所与が現実界に介入するさまを単一の仕方で表現することはできない。一空間領域あるいは一精神状態を特性づけるだけという具合に表現することはできない。直接的な sense-perception に必要な感覚所与は環境の efficacy (能動性) の力を藉りて経験のなかへと入りこむ。この環境には身体諸器官も含まれている。例えば、音を聴くばあい、物理波が耳に入り、神経の興奮が脳を刺激したのである。そのとき音は外部世界のどこかある領域から来るものとして聴かれている。このようにして causal efficacy の状態における知覚が露わにすることは、sense-perception の状態における所与は前者の知覚状態が提供する、ということである。この理由があればこそ、[sense-perception ニ]与えられる要素も存在する。このような所与の一つ一つが知覚二様態の間を結ぶ糸をなしている。このような糸が、すなわち所与の一つ一つが経験のなかへ複雑に侵入してきては、知覚二様態への reference を求めている。〔経験ノ瞬間ノ〕同時世界の組成体と過去の環境の組成体との間には多項目にわたって結ばれている一つの関係があるわけだが、この関係の性格を構成してゆくものが感覚所与であると考えることができる。」

symbolic reference が可能となるためには、二様態を以て把握えられる知覚対象に共通性がなければならぬ。その共通構造の要素をホワイトヘッドは(一)感覚所与および(二)所在地の二つと限って、本節では感覚所与、次節で所在の問題を扱う。

ヒュームの思想では感覚所与は単に「与えられる」とみなされている。これをホワイトヘッドは誤りとし、さらに

アリストテレスに触れて述べた基本思想(第二章第一節 本稿十二頁)から否認する。知覚の瞬間に世界は現実態としての姿を現出させてくるが、その根底をなす自然的可能態は、意識の有無に関りなく、破綻なき有機的聯関を保ちつつけているのであり、ここを支配するのが causal efficacy にほかならぬ。すなわち causal efficacy の知覚が先行しており、この前提の上にのみ感覚所与の意義と役割とは明されると説くのである。感覚所与の第一の役割についてはすでに第一章第八節に同様の記述とその例解とがあった。

興味ぶかい独得のヒューム批判を含む本文の主旨は、すでに理解をすすめてきたわれわれにとつては、抵抗のないことであろう。結尾に語られているように感覚所与は単に客体の性質 (the mere qualification of a region of space) あるいは主体の心的状態の性質 (the mere qualification of a state of mind) として固定的に表現することはできず、知覚二様態の間を結ぶ連結の糸として動的な役割を担わされている。

二六、所在規定 (localization)

知覚の二様態が共通の一世界をそれぞれ直接に立証できるのは、部分的にであるとはいへ「二様態ノ把エル世界ノ」構造に共通性があればこそである。そしてこのような部分的共通性は、知覚二様態が両者共通の感覚所与を、相異なる地点であれ同一地点であれ、とにかく両者共通の空間・時間体系内における位置へと関連づけることから生じている。例えば、色は外部の一空間と視覚器官たる眼とへ関連づけられる。これら純粋な知覚様態のいずれか一方を扱うかぎりでは、右のような関連づけは直接の立証となり、この関連を遊離させて意識的分析を行えば、それは疑う余地なき究極の事実ということになる。このような遊離化、少くともそれに近いことは presentational immediacy のばあいにはかなり容易であるが、causal efficacy のばあいにはきわめて困難である。symbolic reference を一切欠い

た、完全に理想的に純粋な知覚経験というものは、実際にはいずれの知覚様態にとっても得られることがないのである。

われわれの直接的知識を完成させるものは「知覚」二様態間の symbolic reference であるが、これを受容することから、causal efficacy についてのわれわれの判断は解きほぐせないほどに屈曲している。また思惟ばかりでなく、行動・情動・意図などすべて思惟に先行するものもこの「symbolic reference」を受容させている。この symbolic reference は思惟が経験を分析する際の所与でもある。この所与を信頼することによって、宇宙に関するわれわれの概念的構図は全体として論理的には宇宙そのものと整合することになり、また純粋な知覚様態の究極的事実とも照応することになる。だが時にはこの整合あるいは「照応」実証のいずれかが挫折する。そのようなばあい、われわれは symbolic reference に対する全般的信頼を保てるようにおのれの概念的構図を修正しつつ、問題となった reference の一定細目は誤謬と分類して払いすてる。このような誤謬が「紛わしい見せかけ」(delusive appearances) と呼ばれている。この誤謬は、causal efficacy の純粋様態における知覚の際に、空間的時間的な遠近がきわめて漠然としていることから生じてくる。分析的意識のなかへ現れ出てくるものであるかぎり、所在を適切に規定することはできないのである。相関性(相対性)の原理は、適切な意識的分析を行えば右のような所在の諸関係もそれぞれの刻印をわずかも経験内にとどめるのではないか、と期待させる。けれども全体としてみれば、適切といえるほど詳細に分析を行うなどということは、人間の意識の能力をはるかに越えている。

人間の身体の外なる世界の causal efficacy に関するかぎり、「身体」周囲をとりまいて能動的に作用してくる諸諸の存在物の世界はもっとも強く知覚しうる。だが物と物とを、また位置と位置とを正確に識別すると言ったところ、それはきわめて曖昧、ほとんど無視しうる程度のものにすぎない。実際にわれわれの行っている明確な識別なる

ものは、ほとんどすべて、presentational immediacy からの symbolic reference を藉りて生じている。人間の身体については事情が異なる。ここでも、精確に把えた直接的な「所在」呈示を想定して比較してみると、やはり曖昧は残る。それでも、感覚所与の規整に働いている様々の身体器官がどこにあるか、また「感覚的」感情がどこに生じているか、という位置の問題は「身体ニツイテハ」causal efficacy の純粋な知覚様態のなかでかなりよく規定することができる。勿論この規定は symbolic transference (symbolic reference の適用による変移) を加えればさらに強まる。だがこのような変移がなくとも、「身体ニツイテハ」ある程度適切に「知覚所在ノ」明確な境界区分がなされるものである。

このように知覚二様態の交錯において、因果的に感知される人体と「ソノ知覚ニヨotte」直接的に呈示される外部の同時世界との間を結ぶ空間的諸関係は、「知覚対象ノ所在地ニ関シテ」空間的諸時間的関連を求めるとき「考慮スベキ」かなり明確な構図を提供する。われわれは大自然の推移を統御している諸物体について、これらの位置を決定するためには感覚「投射」をシンボルとして用いるが、この利用の適否は右の構図に照して吟味するのである。究極のところ観察とは、科学的なものにせよ日常的なものにせよ、すべて、「投射された」感覚所与の位置に対して観察者の身体諸器官がいかなる空間的關係をもつか、を決定することである。」

二文に分けて和訳した冒頭の原文を掲げておく――

The partial community of structure, whereby the two perceptive modes yield immediate demonstration of a common world, arises from their reference of sense-data common to both, to localizations, diverse or identical, in a spatio-temporal system common to both.

前節を承けて本節では知覚対象の所在地が論じられるが、同時にここでホワイトヘッドの想定する實在論的宇宙の全構図もみえてくると言えよう。冒頭の一文を具体的に説くために色の例が挙げられているが、色についてはすでに「物からはなれた色をわれわれは知覚しない」(第一章第八節)という明言があった。色は物に即して在るものとして presentational immediacy の知覚様態がこれを持える。だが同時に眼(視覚器官)が持えるのであり、この知覚は causal efficacy の様態をもつ。色という同一対象がこのように分たれて知覚されるわけであるが、同様態をみせる知覚主体が一箇の統一体であるかぎり、知覚作用の及ぶ距離に遠近の差、その密度に粗密の差が存在するとはいえず、あくまで同様態は同一時空内に不可分の関係に結ばれて生起する。しかも高度組成体たる人間は意識を具えているから両者を関連づけてこれらを意識的にも統一する。もしも同様態を仮に各々独立させ他方を全く度外視して知覚主体と知覚客体との相関を考え、これを意識に把えて言明を行ったとすれば、例えば「バラが赤い」(presentational immediacy) および「赤を知覚する」(causal efficacy) という二命題を得ることになる。ここに命題化された二つの事柄がそれぞれ「究極の事実」(ultimate fact) と言われているものにほかならない。けれどもこのような作為は実際には全く不可能である。——具体例に即してみればこのような見解がホワイトヘッドの基本思想であらう。

ホワイトヘッドは第一章第四節において「真理を知り、誤謬を犯し、かつ真理・誤謬の弁別をなしうること」が人間心性の基本条件であり、人間論の肝要な課題はとりわけ誤謬の根拠を明確にすることと断言していた。本節はこの課題に対するおのれの最終的解答を示した箇所ともなっている。物の直接的認知(direct recognition)は知覚の二様態が行う(第一章第四節)。これら二様態が交互に把えた知覚対象を結び合せるとき直接的知識(direct knowledge)が完成する。その結合を果すのが symbolic reference であり、意識的存在たる人間が知識を獲得する際には、必ず、symbolic reference の助力をえている。(人間の身体についてはやや事情が異なり、「痛み」などの知覚については、痛み

を感じれば因果の連鎖を以て—causally—その所在もすぐ判るようであるが、それでも所在の確定にはなお曖昧が残る、ここでもやはり symbolic reference を加えれば所在が一層明確になることには変りがない。(transference の用語については本章第一節八頁参照)。ところでこのような symbolic reference の一契機、causal efficacy の様態における知覚が、先述のごとく presentational immediacy と不可分であるために、知覚対象に向う空間的時間的な perspective (遠近の見通し) に関しては——すなわち大自然の必然的推移の精確な把握に関しては——本質的に曖昧が秘められている。それゆえに symbolic reference の帰結は誤謬を含むのである。

しかし、このように誤謬を含むにもかかわらず、われわれは symbolic reference に全般的な信頼を寄せている。その信頼の根拠はどこにあるかといえば、本節冒頭の一文へ還ることになる。知覚の発動とともに、人体を中心として知覚諸対象へつながる無数の連鎖が構築されてゆく。その際、同一の対象は二つの様態を以て把握られるが、いずれの側からみてもそれは感覚所与であるという点で共通し、さらに所在に関して不可分の聯関をもっている。それゆえ、二枚のレンズが同一焦点を把えたと距離も見定められるように諸対象も知覚成立と同時にそれぞれの所在地を定められてゆき、ここにかなり明確な構図が浮びでてくる。しかもこの全体的な構図が大勢としては万人共通の確固として歪みの少ないものであると確信して、ここにホワイテッドはおのれの実在論的宇宙像を樹立するのである。このような基本思想からみれば当然のことであろうが、科学的世界像と日常的世界像との本質的同一性を示唆する言明にも注目しておきたい。文を分けて和訳した末尾全段の原文を掲げておく——

Thus in the intersection of the two modes, the spatial and temporal relationships of the human body, as causally apprehended, to the external contemporary world, as immediately presented, afford a fairly definite scheme of spatial and temporal reference whereby we test the symbolic use of sense-projection for the determi-

nation of the positions of bodies controlling the course of nature. Ultimately all observation, scientific or popular, consists in the determination of the spatial relation of the bodily organs of the observer to the location of 'projected' sense-data.

sense-projection, 'projected' sense-data に関つてはすでに第一章第八節に詳しい言及があった。

「七、精確性と重要性との対比

投射された感覚所与が一般にシンボルとして用いられる理由は、それが便利で明確で扱いやすいからである。見る見ないはわれわれの好むままである。聴くこともできるし、聴かないでもよい。感覚所与のこのような便利には若干の制約もあるが、とにかくこれは世界を知覚するに当って断然扱いやすい要素である。「コレニ対シ、自然ノ推移ヲ」統御してゆく現存諸物を抱える感覚 (the sense of controlling presences) は逆の性格をもち、扱いにくく曖昧で明確を欠いている。

けれども、曖昧で明確を欠くにもかかわらず、「自然ノ推移ヲ」統御してゆくこれらの現存諸物、すなわち力の源泉 (these sources of power) また内的生命を具え、それぞれ豊かに固有の内容をもつこれら諸物、おのれの本性のなかに世界の運命を潜めているこれら諸存在——これらこそはわれわれの知りたいと願うものなのである。交通のばげしい道路を横切るとき、数々の自動車の色を眺め、それらの形、乗る人々の華かな色どりを眺める。だがその瞬間にわれわれは、直接に映るこの観物を、直後の未来を決定してゆく諸力のシンボルとして、その利用に専心している。

われわれはシンボルを快く用いつつ、その意味 (the meaning) へまでも洞察を深めてゆく。シンボルがおのれの意味を創りだすことはない。「知覚作用ニ対シテ」反応を返し現に効果を及ぼしてくる存在者という形式をとって、意味

はわれわれにとって独立に存在している。だがわれわれのためには諸々のシンボルがこのような意味を露わにしてくれる。生物組成体がおのれの環境に適応してきた長い過程のなかで、自然がシンボルの利用を教えてくれたからである*。そのためにわれわれは発達し、遂には、投射されたわれわれの諸感覚が、重要組成体の位置する諸領域を、大體はさし示してくれるまでになったのである。

* 原注 Cf. *Protogenesis to an Idealist Theory of Knowledge*, by Norman Kemp Smith, Macmillan and Co., London, 1924.

これら「重要組成体ナル」諸物体に対するわれわれの関係とは、まさしく、これらに対するわれわれの反応 (reactions) のことである。われわれが感覚を投射することは世界を图示することにほかならないが、このような世界とは、右の反応の順応合致してゆかねばならぬ「破綻ナク有機的聯関ヲ保ッテイル全宇宙ノ」時空間の体系的構図と部分的に一致するものである。

causal efficacy の諸々の絆はわれわれの外から生じてくる。これらはわれわれの生い立った世界の性格を、またわれわれの自己形成に際して逃れがたい条件を露わにしてみせる。

presentational immediacy の諸々の絆はわれわれの内から生じてくる。これらの刺戟をわれわれが受け入れるか退けるかによって、これらは「ワレワレニ対スル」強化作用あるいは抑制・牽制の作用をみせやすいものである。術語は何でもよいのでなければ、感覚所与を「単なる印象」(mere impressions) と呼ぶのは適当でない。われわれ自身の本性が条件づけている積極的知覚機能——この機能のはたらきに由来する諸条件を感覚所与もやはり示しているからである。けれども、われわれの本性は causal efficacy に順応合致しなければならない。それゆえ過去からの causal efficacy は現在にわれわれの presentational immediacy を与えてゆく少くとも一つの因子である。現在の経

験がいかにして成るかのいかには、われわれにおける過去はなにであつたかのなにに、必ず順応合致しているのである。

われわれの経験は過去から生ずる。経験は情動や意図を添えて同時世界の呈示を豊かにする。また、いつまでも世界の豊かさを加えたり減じたりしてゆく能動的要素という姿をとって、経験はおのれの性格を未来へと遺贈する。良きにつけ悪しきにつけ、ふたたび記すごとく――

'Pereunt et Imputantur'

（時がいつか滅びては、その責を問われてゆく。）

本節の内容は第一章第二章の論述を両様態の知覚対象に関して対照を鮮かに整理したものである。

presentational immediacy の様態において把握られる知覚対象は表層のものであるが明確であり、他方、causal efficacy の様態において把握られる知覚対象は曖昧であるが重要である。人間は前者をシンボルとして利用し、これを通して後者に迫ろうと努めてきた。このときに行われる両者の関連づけの営みが一切のシンボルズムの基底なのである。本節の整理を以てシンボルズムの原理はすべて語り尽された。

本節の原題は *The Contrast Between Accurate Definition and Importance* とあるが、本節の記述と次節の用語とを勘案して表記のように訳しておく。

「意味」(meaning) については、シンボルの形式的定義のおかれた第一章第五節の冒頭に、すでに簡明な規定がみられた。それをここに採録する。――「心的経験の構成因子のいくつかが、ほかの諸々の構成因子に関して、意識・信念・情動・使用法などをひきだすとき、人間の心は象徴的に機能している。このばあい構成因子の前者の一群は

『シンボル』となり、後者の一群はそれらシンボルの『意味』（meaning）を構成する。その際、シンボルから意味への移行を行う有機的な作用が symbolic reference と呼ばれよう。」

原理を確立したホワイトヘッドは次節の要約をへて、多様な人間文化の諸相にいいよ論を移してゆく。

一八、結論

本章と前章とにおいてシンボリズムの一般的性格を論じてきた。シンボリズムはすべての高度組成体がおのれの生活を営む仕方の中で支配的な役割を演じている。それは進歩の原因であり、また誤謬の原因でもある。高等動物は強力な一能力（シンボリズム）を獲得してきた。この能力を用いることによって、遠方にもながらも将来のおのれの生活を決定してゆくはずの諸状況を、「現在ノ」直接的な世界のなかに、ある程度精確に規定することが可能になったのである。しかしこの能力は無謬ではない。その重要性和相半ばして諸々の危険もまつわっている。このシンボリズムの習慣が種々の人間社会の結合・進歩・解体を促進するに際して果してきた役割——これを分析して私の教説を例解することが次章の目的である。」

〔未完〕